

明石一族にみられる血の誇り  
——明石一族の上層志向の性格について——

The character of Akashi Family  
as to upgrade tendency into higher social standing

金 順 姫\*

The tale of Genji, among 54 volumes of books, regarding to Akashi family was to secede out of then existing society, became a certain district of governor (ZURYO) to fulfill his duty where lived for the rest of his life being indigenou and took utmost care for his lovely daughter to find out desparately a betterhalf whose social standing must be rather higher at that time was the basic conception and progress story of this writing. I would like to study on the character of Akashi's daughter who must be considered by her father as extraordinary to be in a higher social standing.

Regarding to Akashi family story, we could see that style and model of Akashi family was different image from what had been existing and prevailing as district of governor (ZURYO). Akashi nyudo, whose father's social status was a minister, being on the verge of downfall of his family,

---

\*KIM Soon Hee 慶熙大学外国語大学講師。関西学院大学文学部卒業、韓国外国語大学大学院日本語科修了。論文に「宇治十帖にみる女のさが——大君・中君・浮舟——」「紫式部におけるものけ」などがある。

had a daughter after an auspicious dream from which gave him courage and very much expected her daughter having realized a dream come true to be a well-connected family in terms of lineage. In his auspicious dream, right hand means his daughter, sun means king and moon means empress. Akashi nyudo hid into the mountain as soon as noticed that son was born who is to be a king in the future. From the beginning, Akashi was a hidden existence and his daughter's status was not to be a power control-oriented one but genuinely to be merged into well-connected social standing. Eventually, this meant to be a part of lineage not to be a rise of family. The reputation of lineage of people lead to immediate lineage consciousness and having the more strong lineage consciousness the more respects and homage renders to its origin. Accordingly, people themselves tend to connect to meaning of origin which might lead to have a lofty ideal as well as vitality. The lineage of Akashi family reputation might be a lineage consciousness.

#### はじめに

『源氏物語』五十四帖の中で、明石一族をめぐる物語は、自ら貴族社会から抜け出し一介の受領となり、任果てた後に明石の地に土着して一人娘をかしづき育てながら、その娘の結婚相手には中央の高貴な出自の人をと念願し、奔走している明石入道と、常に「身のほど」を意識しつつも、明石入道の意志を受けついで葛藤する娘明石君の話が、基本構想となってすすめられている。

従来、明石一族の物語は、先学達により明石入道・明石君の二人を通してさまざまな視点から論ぜられてきたが、本稿では、異様ともみられるほどの上層志向に対する熱望に燃える明石入道と、入道とは対蹠的な位置におかれている妻明石尼君の、それぞれに関する叙述をたどることで、そこにみられ

る両者の意識を支えるもの、役割の相関関係を分析し、明石一族の上層志向の性格について考察してみることとしたい。

### 一、入道の造型の意味するもの

明石一族が具体的に物語に登場するのは須磨巻からであるが、その伏線は既に若紫巻で播磨守子良清によって光源氏に伝えられる形で表現されている。すなわち、良清の語る噂話の中で明石入道の人柄が述べられている。

大臣の後にて、出で立ちもすべかりける人の、世のひがものにて、交らひもせず近衛中將を棄てて、申し賜はれりける司なれど、かの国の人にもすこしあなづられて、『何の面目にてか、また都にもかへらん』と言ひて、頭髮もおろしはべりにけるを、(中略) 後の世の勤めもいとよくして、なかなか法師まさりしたる人になんはべりける (中略) 『わが身のかくいたづらに沈めるだにあるを。この人ひとりにこそあれ。思ふさまことなり。もし我に後れて、その心ざし遂げず、この思ひおきつる宿世違はば、海に入りね』と、常に遺言しおきてはべるなる(若紫<sup>註1)</sup> 276頁)

これを要約すると、明石入道は大臣の位にあった父を持つ身であったのだが、なにゆえにか自ら近衛中將の職を捨てて播磨守になることを願い出て、任国に赴いたのである。しかし、自ら求めた新たな世界でも人に侮られることがあり、出家をしてしまう。出家したのに山にも入らず、海の近くに妻娘の為に立派な住居を構え、そこで毎日の勤行を怠ることなしに行ない、在家時代よりもはるかに人柄のまさった人物となる。ところが、一人娘に対する期待は大きく、しかも相応な身分を越えたもので、加えて「この思ひおきつる宿世違はば、海に入りね」と予め遺言まで用意しており、これ以外の方法は考えも出来ない悲愴な覚悟のほどが窺われる。受領に落ちぶれたにも拘わらず、且つ、出家の身であるにも拘わらず、強い上層志向を捨て切れぬという、その人物描写に、矛盾した二面が描き出されているのである。

一方、源氏の目を通して見た明石入道は、

入道の領じ占めたる所どころ、海のつらにも山隠れにも、時々につけて、興をさかすべき渚の苦屋、行ひをして後の世のことを思ひすましつべき山水のつらに、いかめしき堂を立てて三昧を行ひ、この世の設けに、秋の山の実を刈り取め残りの齡積むべき稲の倉町どもなど、をりをり所につけたる見どころありてしあつめたり。(明石 224頁)

の如く、風流好みの生活をしている人物像として映じており、音楽の方面でも非常にすぐれていて、琵琶や箏の琴の腕前は、「延喜の御手より弾き伝えること三代」と、当時の一般の受領像一例えば、東屋巻に登場する常陸介の如き一とはほど遠い高尚な人物としての造型である。その容姿も、「いときよげにあらまほしう行ひさらばひて、人のほどのあてはかなればにやあらむ」(明石 227頁)と、日頃の勤行でやつれ、やせていて清潔感があり、教養もにじみ出ており、源氏には好感のもてる人物となっている。自ら好んで一介の受領に落ちぶれていったにも拘わらず、娘を都の高き人と常に望む入道も、さすがに源氏と接する態度には日頃とは異なる気弱な面がみられ、畏れ多くていつもかなり離れた下屋にかしこまって控えているのである。又、「わが思ふことは心のままにもえうち出で聞こえぬを」(明石 227頁)と、いざとなると自分の切なる願いを、思ったまま口にも出せずにいる。その後、努力の甲斐あって、娘明石君は源氏と結ばれる。源氏が、妊った明石君をおいで帰京する際も、入道は出発の準備を盛大に整え、源氏の帰京を寿ぎながらも、妻の尼君や乳母達にそしられると、「いとどほけられて、昼は日一日寝をのみ寝暮らし、夜はすくよかに起きゐて、『数珠の行く方もしらずなりにけり』とて、手をおしすりて仰ぎゐたり。」(明石 260頁)の如く、部屋の隅で小さくなるばかりか、弟子の僧達にもばかにされたため息をついているのであった。

前述した良清の噂話の中にもあるように、「世のひがものにて、交らひもせず」と周囲の人とのつきあいも悪く、受領としての政治的手腕に欠ける人物であった。子供は明石君一人のみで、権力者としての跡目を継ぐべき息子がいない。以上のような点から考えてみるに、明石入道は、支配権力志向の人

物としては全く描かれていないと言える。にもかかわらず、当時の貴族社会の常識として、たとえかつて大臣（父は藤原氏と推察されるが、それは必ずしも高貴を意味しない。源氏と比べると一段と劣る）の位にあった父を持つ身であったとしても、一度落ちぶれ地方の受領となり下った以上、娘を都の高き人、こともあろうに源氏のもとにと望むというのは、当時の現実としてあり得ないことである<sup>註2)</sup>。作者紫式部が描こうとしたこの異様ともとれる入道の上層志向は、いったい何を意味するのであろうか。

## 二、入道の入山の時期

この上層志向と矛盾すると思われることのひとつが、明石入道の入山の時期である。

入道は一人娘明石君に大きな期待をかけ、娘の宿世を信ずるが故に、近衛中将の地位を捨て、一介の受領として播磨国に下っていった。そして、待ちに待った源氏との出会いがあり、入道の奔走によって、源氏と明石君は結ばれる。煩雑ををいとわずくり返し述べるならば、源氏は許されてひとり帰京するものの、明石君はすでに妊っており、入道の年来の夢は着々と実現へと近づいていく。娘明石君と源氏の事に一喜一憂しつつ見守っている入道は、夢実現のために最善を尽くすのである。明石君が姫君を出産したことを都で知った源氏からは、選びぬかれた乳母が送られてくる。入道にとって、送られてきた都の乳母の存在意義は大きく、早速妻明石尼君の所領（中務宮）である大堰邸を修理させ、妻の尼君、娘明石君、それに孫娘明石姫君の三人を上京させてそこに住ませ、自らはひとり明石にとどまり、ひたすら祈りの生活に入るのであった。

何故入道は女達と共に上京しなかったのであろうか。入道の上層志向が、外戚としての、支配権力の志向につながるならば、共に上京したであろう。ここで特に注目すべき点は、入道の入山の時期である。入内した姫君の男御子出産の知らせを聞くやいなや、三日後に俗世から姿を消したのは、自分の

身分の卑しさが姫君や御子の前途の妨げとならないようにとの配慮からだったのである。長文ではあるが、左に該当部分を引用しておきたい。

「今なんこの世の境を心やすく行き離るべき」と弟子どもに言ひて、この家をば寺になし、あたりの田などやうのものはみなその寺のことにしておきて、この国の奥の郡に人も通ひがたく深き山あるを年ごろも占めおきながら、あしこに籠りなむ後また人には見え知らるべきにもあらず、と思ひて、ただすこしのおぼつかなきこと残りければ、今まで長らへけるを今は、さりともと、仏神を頼み申してなむ移ろひける。一略一つてに承れば、若君は、春宮に参りたまひて、男宮生まれたまへるよしをなむ、深くよろこび申しはべる。そのゆゑは、みづからかくつたなき山伏の身に、今さらにこの世の榮えを思ふにもはべらず、(若菜上 104～105頁)

「この御文書きたまひて、三日といふになむ、かの絶えたる峰に移ろひたまひにし。略」(若菜上 109頁)

しかし、これは当時の貴族の実態からすれば、想像出来ないような無欲さである。外戚としての権力志向を有していたのなら、皇子誕生と聞いても、その皇子が立太子の時期まではぜひとも生きようとしたであろう。しかし、皇子誕生の知らせを受けて三日後に、入道は山に姿を隠したのであった。これは、明らかに入道の上層志向が支配権力志向でなく、血を皇統にまじえ、その血筋を後代に伝えていくことを意味しているのである。入道が権力に対して無欲であったことは、源氏の言葉として、「聖だちこの世離れ顔にもあらぬものから、下の心はみなあらぬ世に通ひ住みにたる」「さるべきにて、しばしかりそめに身をやつしける昔の世の行ひ人にやありけむ」などと述べられており、その出離の潔さ、脱俗の徹底さが再確認されているのである。

さるべきにて、しばしかりそめに身をやつしける昔の世の行ひ人にやありけむなど思しめぐらすに、いとど軽々しくも思されざりけり。(若菜下 160頁)

「さらば、ひが心にてわが身をさしもあるまじきさまにあくがらしたまふ、と中ごろ思ひただよはれしことは、かくはかなき夢に頼みをかけて、心高くものしたまふなりけり」と、かつがつ思ひあはせたまふ。(若菜上 111頁)

### 三、靈夢の意味

現実的で物質欲の強かった当時の受領階級の実像とはほど遠くかけ離れた、風流好みで、音楽に才能があり、気弱で無欲な入道が、娘の結婚相手には都の高き人、こともあろうに源氏をなぜ望んだのであろうか。入道には明石君が生まれる前にみた靈夢に関して、それは狂信的な信仰と言っても過言ではないほどの強い確信があったのである。その確信が、入道の言う「宿世」<sup>(註3)</sup>に対する期待、実現に向かったの行動を支える意識として強く存在するのである。はたして、入道の異様とも思われる行動を支える意識の動機となった靈夢とは、いったい何であったのだろうか。

わがおもと生まれたまはんとせしその年の二月のその夜の夢に見しやう、みづから須弥の山を右の手に捧げたり、山の左右より、月日の光さやかにさし出でて世を照らす、みづからは、山の下に蔭に隠れて、その光にあたらず、山をば広き海に浮かべおきて、小さき舟に乗りて、西の方をさして漕ぎゆく、となん見はべりし。夢さめて、朝より、数ならぬ身に頼むところ出で来ながら、何ごとにつけてか、さるいかめしきことばを待ち出でむ、と心の中に思ひはべしを、そのころより孕まれたまひにしこなた、俗の方の書を見はべりしにも、また内教の心を尋ねる中にも、夢を信ずべきこと多くはべりしかば、賤しき懐の中にも、かたじけなく思ひいたづきたてまつりしかど、力及ばぬ身に思うたまへかねてなむ、かかる道におもむきはべりにし。またこの国のことに沈みはべりて、老の波にさらにたち返らじと思ひとちめて、この浦に年ごろはべりしほど、わが君を頼むことに思ひきこえはべりしかばなむ、心ひとつに多く

の願を立てはべりし。その返申、たひらかに、思ひのごと時に逢ひたまふ。(若菜 105～106頁)

これは、『過去現在因果経』などにみられる釈尊の前生譚に類似したもので、そこから示唆を得ていることは、諸注釈に述べられている。例えば、『花鳥余情』は、霊夢について次のように解釈している。「右の手にさゝくるといふは女をは右につかさとれはあかしのうへをいふなるへし山の左右より月日のさし出たるは月は中宮日は東宮にたとふれはあかしの上の御女中宮にたちて孫に東宮を生給へき瑞也みつからは山のしたにかくれてその光にあたらぬといふはあかしの入道世をのかれて栄花をむさほる心なければかの御徳をはみさるを光にあたらぬとはいへり」(松永本『花鳥余情』 伊井春樹編『源氏物語古注集成 I』 卷十九「若菜上」 桜楓社)と認められているのである。

入道がこの夢を都でみた時点では、まだ娘明石君は生まれてはいないが、夢告を契機として「数ならぬ身に頼むところ出で来ながら」と、失意の生活の中で一条の光明をみつけたのである。すなわち、わが血統に対する誇りは、とりもなおさず系譜意識に通じる。ここであえて「血の誇り」という言葉を使うが、この語の意味は、血の品等に対する自尊心の問題であり、同族に対する根源的な感情である。因みに、系譜意識は韓国には今日でも存し、韓国人としての私は、入道のこの意識に強い関心を抱いた。系譜意識を持っていればいる程、自分自身の始源に対する尊重と敬意を持つようになる。そして、人は自分自身を始源の意味と関連させることにより、より高い理想と活力を持つことが出来るようになるのではなからうか。明石入道は、大臣の位にあった父を持っていた身であり、しかも叔父である按察大納言はほかならぬ源氏の外祖父であり、こうした出自に対する誇りだけで、現実的には没落していくわが身を嘆いている折に見たこの霊夢は、明石入道にとって啓示そのものであったのである。夢を見た後、妻が懐妊すると、「俗の方の書を見はべりしにも、また内教の心を尋ぬる中にも、夢を信ずべきこと多くはべりしかば」と確信し、娘明石君誕生後はかつての霊夢を娘の宿世と考え、光輝く未来へ



の高い理想を抱き、残された人生をその宿世の栄華を実現すべく全力をあげて生き始めるのである。すなわち、明石一族の出自の誇りを、わが身におくのではなく、血に対する誇りを、娘明石君に皇統の血をまじえることに、見いだそうとしたのである。

#### 四、尼君の役割

明石一族の物語において、尼君の存在と言動とは、明石君の生活の指針として強く働いたのではなかろうかと考えられる。そこで、以下、尼君の役割について少し考えてみたい。

入道の系譜意識は、靈夢に基づくものである。その考えは、きわめて観念的にして理想的である。しかし、明石尼君は、夫入道のように靈夢にまつわる信仰を持ちあわせず、又、夙い時点では靈夢について入道から何も知らされてはいなかった。ただし、彼女自身うだつの上らない皇族の出自ではあっても、皇族として生れ育ち、そこで培われた内部から貴族を直視する視点が、彼女の健全ともいえる現実認識を作り出したのであろう。良清の噂話に登場する時も、夫入道や娘明石君にみられるような、将来に対する思いつめた期待又は願望のようなものは見られず、生活を守る女性・母性としての日常的・現実的な人物像として描かれているのである。入道が源氏に明石君を奉ろうと切り出した時も、彼女は猛烈に反対したのだった。将来に対して何の確信も持ちあわせていない尼君としては当然なことで、夢の実現へと心逸る入道にひきかえ、尼君は母としてひとりの女性として娘の平凡な幸せを望み、又、都の貴族の生活を知っているが故に、源氏と娘とはあまりに身分不相応な二人であると考えた。又罪人である源氏の境涯も考えると、二人が結ばれることに反対したのである。

宿世の体現者である明石君が、「身を投げつべき心地」に耐え、最愛の子からも引きさかれ、忍従の道をひたすらに歩みながら、なおかつ貴族社会の象徴ともいえる六条院の一隅を守りおおせたのは、何よりも娘にぴったり寄り

そって来た尼君の現実的配慮・知恵に起因しているといえよう。すなわち、尼君、思ひやり深き人にて、「あぢきなし。見たてまつらざらむことはいと胸痛かりぬべけれど、つひにこの御ためによかるべからんことをこそ思はめ。一略一この大臣の君の、世に二つなき御ありさまながら世に仕へたまふは、故大納言の、いま一階なり劣りたまひて、更衣腹と言はれたまひしけぢめにこそはおはすめれ。ましてただ人は、なずらふべきことにもあらず。」(薄雲 420頁)

と教えている。因みに、尼君は祖父が中務宮で皇統の血をひいているとはいえ、現実の境遇の低さとの二律背反に悩みつゝ生活してきたことで、より現実的な考え方を身につけたと思われるのである。将来国母となるべき姫君に、「今は、とて京へ上りたまひしに、誰も誰も心をまどはして、今は限り、かばかりの契りにこそありけれと嘆きしを、若君のかくひき助けたまへる御宿世のいみじくかなしきこと」と、ほろほろと泣けば、げにあはれなりける昔のことを、かく聞かせざらましかばおぼつかなくても過ぎぬべかりけり、と思してうち泣きたまふ。一略一かの入道の、今は、仙人の世にも住まぬやうにてゐたなるを聞きたまふも心苦しくなど、かたがたに思ひ乱れたまひぬ。」(若葉上 96頁)

と、昔語りすることによって、姫君に祖父明石入道と実母明石君の存在を再認識させ、姫君が明石一族の出自であり、明石一族の血がまさしく皇統にまじわったことを明らかにする結果となった。しかし、尼君自身、自分の「血」の高貴さを積極的に自負する跡は見られず、

尼君、久しくためらひて、「君の御徳には、うれしく面だたしきことも、身にあまりて並びなく思ひはべり。あはれにいぶせき思ひもすぐれてこそはべりけれ。数ならぬ方にてても、ながらへし都を棄ててかしこに沈みぬしをだに、世人に違ひたる宿世にもあるかな、と思ひはべしかど、生ける世に行き離れ、隔たるべき中の契りとは思ひかけず、同じ蓮に住むべき後の世の頼みをさへかけて年月を過ぐし来て、にはかにかくおぼ

えぬ御こと出できて、背きにし世にたち帰りてはべる、かひある御事を見たてまつりよろこぶものから、片つ方には、おぼつかなく悲しきことのうち添ひて絶えぬを、つひにかくあひ見ず隔てながらこの世を別れぬるなん、口惜しくおぼえはべる。(若菜上 111頁)

と、明石君と源氏の結婚により、うれしい思いもしたが、かえって自分と夫入道との結婚生活に大きな犠牲を蒙ったとも口にしてしている。とは言うものの、結果的には夫入道の上層志向に基づいた娘明石君の人生を支える礎いしづえとなつたのであった。

### むすび

作者紫式部が描こうとした明石一族の物語は、きわめて特異なものだった。明石一族にとっての血のほこりとは、支配権力志向を論理のわくの外においた、系譜意識そのもの、言い換えれば、あくまでも精神的な昂揚に基づいた一族の血の誇りの再興、つまり、血の誇りの復活とその増幅とにあったといえよう。

### 註

1. 引用文は、日本古典文学全集『源氏物語』(小学館)による。以下同じ。引用者傍線。以下同じ。
2. 阿部秋生氏『源氏物語研究序説』(東京大学出版会)「須磨明石の構造」所収「物語の人物の生活圏」に詳細な記述がある。
3. 本稿では、丸山キヨ子氏の「明石入道の造型について」(『源氏物語の探求』第五輯)に拠った。因みに氏は、「恐るべき内容の夢をみてひそかに内典・外典を探り、夢の信ずべきことを知って、自ら悟り、それが宿世であるならば、その実現へむけて努力しようと決意したのである。」「……入道はこのように夢告を宿世の暗示としてうけとめた。」と説かれている。

## 討議要旨

小西甚一氏より「勝りの血」「劣りの血」という言葉の提示があり、明石入道のみでなく、中心人物である光源氏や柏木においても「勝りの血」を求める所があったのではないか、という指摘があった。